



## 日本チェンバロ協会会長に小林道夫氏を選出

新しい年を迎え、会員の皆様にはご健勝のことと思います。当協会に日頃より多大のご理解、ご支援を賜り、感謝申し上げます。

2011年10月に発足いたしました日本チェンバロ協会は8ヶ月の準備期間を経て、2012年7月に総会を行い、正式活動を開始いたしました。総会は出席者(7名)と委任状(27通)で議席数の三分の一以上になりましたので、成立とし、議長に岡田龍之介氏を、書記に梶山希代氏を選出して進められました。

運営委員会で、今年度の日本チェンバロ協会会長、副会長、および運営委員は以下のように決まりましたので、お知らせいたします。

会長 小林道夫 副会長 大塚直哉

運営委員 渡邊順生、栞形亜樹子、岡田龍之介、広沢麻美、平野智美、加久間朋子、長久真実子、植山けい、及川れいね、小川絢子、渡邊温子、寺村朋子、副嶋恭子  
(原則として、月1で運営委員会は開かれます)

### ご挨拶

日本チェンバロ協会 会長 小林 道夫

このたび会長をお引き受けすることになりましたが、私は本来、演奏すること以外に全く能のない人間で、およそ役職にふさわしいとは思えません。どうしてもこの会に関わって下さるすべての方々のお力が必要です。どうぞよろしくお願い申し上げます。

演奏家には本来、一人だけでしなければならない作業が山のようにありますが、一方で一人だけでは出来ない事もあります。楽器の問題、技術の問題、演奏習慣の問題などの情報を交換する仲間が居て、ようやく一人善がりにならないですむのだらうと思います。

又、クラヴィコード、チェンバロ、フォルテピアノは、鍵盤を動作させる作業、つまり指を動かすということの基本ができているかどうかを弾く人につけてきますから、ピアノを弾く人達にとっても大切な体験である事は、何も私が申し上げるまでもなく、皆様ご承知のことでしょう。



この協会の働きは古楽の世界にとどまるだけではないであろうと思いますので、まずしっかり足元を固めて、今、出来る事からあせらずに少しずつ、着実に仕事をして行ければと思っています。

どうぞ会員の皆様のお知恵とお力を拝借出来ますように。

## ◎山田 貢 発起人

準備委員会メンバーに1960年代以降のこと、提言とか思いつきを書くよういわれ承諾したものの中々書けずに時間が過ぎてしまいました。協会を作ろうという声が上がってうれしいかぎりですが、祝意を表そうとする一方、取越し苦勞の部分が噴出、錯綜、うまく纏まらないのです。実は40年ほど前にも同様な試みがあったのです。それを思い出して多少の参考にでもなればと綴ることにしました。

日本のチェンバロ第1世代は欧米の第1もしくは第2世代に教えを受けその活動を開始した。バロック音楽の受容も始まったばかりの揺籃模索の時期であった。幸い、チェンバロへの要請も予想したより多かったが、旧体制で固められた音楽界にバロックの原則を移植することは当然大きな拒絶反応を覚悟しなければならなかった。「トリルは上から始めるんですって..」まるで彼らにとって不変の真理を破壊するインベーダーのようにみられる場面が頻発した。内部にも別の問題があった、つまり楽器自体も「モダン」から「ヒストリカル」への回帰の時期であったため多くの戸惑いや迷いが行方を阻んだ。「戸惑いや迷い」といえば、欧米の師匠格たる第1、2世代もそれに無関係という訳にはいかなかったし、もっと強い悩みに出会っていただろうと推測される。彼らは自身の立脚点保持のため、似かよった解釈を対立するものと言い、または本流に属さぬと

## 日本チェンバロ協会 発足に寄せて

と主張する性癖を無意識的に作ったのではないだろうか？我々にも受け継がれているだろうこの極端さは、たとえば「〇〇は協会に不相当だ、従って入会させず」という極端な純粋主義になって現れたりもした。この病的ともいえる症状に対しては「他者へむかって包容力と共有をもって接する」という治療が不可欠だと思うが「云うは易く、行は難し」だと思う。

さて、日本の第1世代は当時、学んできたものをコツコツと検証中であった。考え方がまだ宙づりの状態だったから協会成立へとエンジンがかからなかった、といえるかもしれない。時期尚早といってしまうれば簡単であるが、むしろ「考え中」という肯定的措置であったとみたい。

おそらくメーカーや楽器研究者らとの協調を要らないという人はいないでしょう。聖人たちの集まりではないから完全一致を望めば仲良しクラブと化しふやけてしまうことだろう。メーカー間で企業秘密の自由な交換が行われる、考えるだけで気持ちが悪い。メーカーは必要あらば独自のものを作ればよろしいのではないか。私はマグダレーナの音楽帳の中のAria di Giovanninの一節、”Die Liebe muss bei beiden allzeit verschwiegen sein”を思い出す。日々満足を提供してくれる楽器、その製作者への感謝と信頼は個人的なものだと思う。

昔むさぼるように読んだ楽器論、詳細な報告的所見は最近、以前ほど出てこなくなった。新事実の発見が乏しいためであろう。できうる限り多くのデータから包括的な結論を抜きだす仕事はまだまだ初期的な途上

にある。ここも、連携の是非が問われてしかるべきものかと思われる。過去にあった純粋主義にお前もはまっているのではないかと責められてもしかたないが....ともかく出てくるだろう事象を老婆心ながらいささか危惧しております。今日は情報過多の時代、クラウドという情報貯蔵機能も現れた、ネットの恩恵になれっこになり、二次資料（要点だけを引用）から自分自身で原典へさかのぼる機会はどんどん減少してきている。眼前を通過する安易な情報に惑わされない姿勢が重要かつ必要であります。

もともと演奏家というものは個性派で、自我の強い人たち、ましてやチェンバロという尋常な扱いでは発動してくれない楽器を相手にするバイアスがかかってチェンバリストが存在します。このような人々の協会はさぞ大変であろうと予測されます。しかし難事、難局に出会いますます奮発することは望ましいでしょう。すぐさま決裂は困ります。前述したようなチェンバロ奏者（第1、2世代と分類した）のアプリオリな性格は変えられないでしょう、そもそも、そういうDNAをもつ人がチェンバロに惹きつけられた訳ですから。

## ◎野村満男 楽器学

最近、知人に誘われるままフェイスブック登録をしたら、次々と懐かしの面々と繋がり、生活革命を促進するITパワーを感じた。音大で優秀だった女性も、音楽と無縁の人生にシフトしたときが最初の危機。消えていく人もいるなかで、子育てしながら近くリサイタルというフルート奏者の書き込みを見て、ぜひ聞きに行こうと思った。これは、ウェブ上の社会的ネットワーク効果の例。ウェブのイージーさはないが、結社作りは音楽家にとって似た効果も期待される。仲間がいたほうが一人で悩むよりずっといい。一般の方にとって、信頼できる道しるべができ、愛好家人口の増加に向けた動きがとれるだろう。

会発足後の夢。

蔵書にしたいくなる会報の発行。先輩格のオルガン研究会の会報もよかった。ピリオド奏法研究は大切でどうしても楽理的になるが、ワークショップや発表の場提供。英国のHarpichord & fortepianoマガジン誌2001年春号に出た、直接存じ上げないのでKazu Ishiguroのような方かもしれないが、Asako Hirabayashi『エリザベス朝ヴァージナル音楽の装飾音・・・』関連論文のような研究は日本から発信できると良いし、大学の研究紀要より良いポジションがとれる。

だが、終わりの見えない藝術至上主義や学者になるより、良質の実践的エンターテイナーとして刺激しよう。そして古楽人口をふやす。

新作チェンバロ曲の演奏ほか現代的活用も忘れずに。

楽器製作者にとって究極の課題は「いい音」。そのための情報交換発表ができるシステム作り。上記マガジン誌に同時に出たMitchellの報告（超低ピッチをRCM蔵1531年作Trasuntinoのコピー楽器で実験した）程度の研究ができるといい。等々、心配性の高齢者発言をするたびに思い出すのは、ドラッガーの「責任がない補佐役は有害である」という指摘。でも、このさい『マネジメント』の名言は参考になる。マーフィーの法則に曰く「失敗する可能性があれば失敗する」という不安はあるが、このたびの結社作り期待するところ大なるものがある。

## 日本チェンバロ協会設立記念イベント 開催報告

# チェンバロの日！

2012年

松本記念音楽迎賓館

大嵐の来るのを知っていたのか遅れた桜もようやく満開、花祭りと復活祭が同日となった4月8日、世田谷の閑静な住宅地の一角で、普段滅多にこれだけ集まらないであろう音楽家達＝チェンバロ奏者と愛好家が有意義な時間を共にした。チェンバリストというのは、一人で閉じこもって仕事をするのを好むタイプが多いのかもしれない。

私が12年前に欧州から戻って来た時にも、狭い社会の割に横の繋がりが希薄な印象を受けたのを覚えている。あの個人主義の最たるフランスでさえ「クラヴサン協会」を立ち上げ、国内外での情報交換の場所を持っているのに、日本では、どこで誰が教えているのかもお互い知らずに活動しているよう

であった（日本ではクラヴィコード協会が1996年より存在し興味深い例会など行っていた2001年で活動停止、今は完全に終了している。オルガン界は2つも団体を持っており、私は運営にも少々関わって来た。チェンバロでこのような機関がないのも不思議だったが、絶対的な必要性も正直感じず、誰かがそのうちやるだろうくらいの感覚でいた）。今でこそ明かすが20年程前、故鍋島元子氏が、ほぼ面識のない私を自宅へ呼び、「貴女達の世代は、もっと横の繋がりを持つべきだし、それをやって欲しい。私達は私のせいで出来なかった」という告白をされて驚いた。当時は曖昧な返答をし、その事すら忘れていたのだが、去年、現在まとめ役をやっている加久間氏（鍋島門下生）からチェンバロ協会発足の打診があった時これを思い出し、重い腰を上げるきっかけとなった。発起人集めから会則設定、ホームページ制作、数々の会議を経てやっと設立イベントまでこぎつけた。会議の出席率の非常に悪かった私であるが、罪滅ぼしとして、ここに一日の様子をご報告を致したい。栗形亜樹子〔日本チェンバロ協会発起人 企画担当〕

\*午前10時半開場：一番乗りは新潟からいらしたというので、まず驚く。

\*午前11時-13時セミナー：会員（専門家、奏者者と製作家）とサポーター（愛好家）向きの2種の同時進行。以下のレポートはそれぞれにデモンストレーターとして参加された演奏家にお願した。

栗形亜樹子〔日本チェンバロ協会発起人 企画担当〕



受付風景



楽器の話で使用されたチェンバロ2台  
フレンチとイタリアン



楽器の話 構造説明のスナップ

楽譜 CD 販売、楽器試奏ブース



### サポーター向け楽器の話「フレンチとイタリアンタイプの楽器、音色の違いについて」

話：安達正浩、演奏：大村千秋、小川絢子(Aホール)

「面白すぎて弾けなくなるよ!」。それは本当だった。つまり、安達氏の話は非常に面白いがゆえに、出番を待ちつつ横で話を聞いている奏者も大笑いをしてしまい、演奏どころではなくなってしまうというのだ。確かに。しかし、ユーモアに富んだ話の端々に、深い知性と洞察が見え隠れする。実際に楽器を製作している方だからこそ見えてくるものがあるのだろう。それは私のような未熟で半端な奏者では想像もつかないようなことなのかもしれないと思った。それほど安達氏の話は聴き手を惹きつけるものだったように思う。

この場に用意された楽器はイタリアンと18世紀フレンチの二台。どちらも製作は安達氏によるもので、フレンチ・タイプの方は会場である松本記念音楽迎賓館所蔵のものである。イタリアンはというと、この4月8日を目指して製作され、なんとこの日の朝に完成したという、できたてホヤホヤの楽器であった。そのため製作者は皆睡眠不足、楽器には木くずが…。まずはイタリアンタイプの解説に始まり、次にスペイン、フランドル、イギリス、フランスと辿り、18世紀フレンチタイプまでの各特徴を説明。チェンバロの歴史やメカニックといった基本的な事項はもちろん、使われている材木の少し詳しい話、当時の人々のモノの考え方など話題は様々。安達氏は、単に結果を言うのではなく、当時の人はきつこう考えたのだろう、だから楽器がこうなった、こう変わっていったという説明をたくさん加えて下さった。なるほど、その過程を知ることが大切である。

それらの解説に演奏を交えていく。イタリアンでは、ファルナービーのオールド・スパニョレッタ、ピッキのバッサ・エ・メッツォ、フレンチでL.クーブランのプレリュード、ダンゲルベールのアルミード・バッサカーユ。安達氏は曲目解説まで担当。作曲家や作品の詳細にまで話が及んだので、より楽器との関連性が浮き彫りとなり、聴き手にとって当時の様子を知る手がかりとなったのではないだろうか。

続いてフレスコバルディのトッカータ、D.スカラッティのソナタ、デュプリのアルマンド、J.S.バッハのバルティータ第4番序曲と、奏者を違えて2曲ずつの演奏。時間との兼ね合いが難しい中、話だけではなく、なるべく沢山の演奏をお聴かせしようという安達氏の思い、それは同時に、準備した曲は全て弾かせてあげようという、若手奏者に対する気遣いでもあったと推察する。終わり近くには別ホールからの参加者も流れ、部屋は大盛況。最後にJ.S.バッハに対する安達氏の考えなども聞くことができ、盛りだくさんの会となった。これらはAホールという場所で行われたのだが、その窓からは見事な桜の木が目前に迫って見える。窓に近寄って見下ろすと、茶室や鯉の泳ぐ池が眼下に広がるのだが、しかし窓から離れて見る景色が圧巻であった。特に私が担当したイタリアンの前に座った状態で窓に目を向けるのが最高。堂々とした桜が映画のスクリーンのように目に飛び込んでくる。そういえば去年は桜を觀賞する心の余裕などなかったなあと、今日という日を迎えられることを有り難く思った。

(小川絢子・記)



シンポジウム 左から風間氏、小林氏、西川氏、山田氏、荒川氏、渡邊氏、司会の岡田氏



プレイエル社製タンドフスカ・モデルチェンバロを説明する風間氏

## 会員向け勉強会「ラモールの音律 解釈と実践の試み」

講師：藤原一弘、演奏：野澤知子（Bホール）

18世紀前半のフランスで用いられた音律の一つであるいわゆる「ラモールの音律」は、その記述の曖昧さから今まで様々な解釈がされてきました。従来の諸解釈より一層ラモールの原典の記述に近く、また調律しやすい解釈をご紹介しました。出典は *Nouveau système de musique théorique...* Paris, 1726 (Gallica: Bibliothèque mériqueにて閲覧化)の最後の音律の章。

- ・今ではオリジナルの資料を自宅で見ることができるので、ぜひ一度自分で解説することを勧める。

- ・ドイツではモノコルドの分割などを用いて数学的な思考であるのに対し、フランスではあえて数値化しないで、様々な可能性が広がる曖昧な表現。これは各国のメンタリティの違いである。

- ・音律をチューナーではなく、自分の耳で2つの音の響きを確認しよう。5度や長短3度などの響きの特長を覚え、各音律、各国の方向性を知ることが、音楽を演奏する上で役に立つ。

- ・ラモールの音律の特長。Cから開始する場合。最初のいくつかの5度を狭く。とりわけCからの長3度は純正に。半分（6つか7つ）を過ぎたら、狭めていった5度（ $-1/4sc$ ）をやや純正に近づける。そして純正5度、それより広い5度（ラモールは2つと言っている）などを少しずつグラデーションのように広げ最後まで続ける。そしてラモールによるB $\flat$ から開始する案、藤原氏のFから開始案の提示。

- ・ラモール音律は、ミーントーンのようにヴォルフの影響によって弾けない長3度ができない。ドイツ系はすべての調を弾けるよう（平均律への過程）、すべての5度を純正か、狭く、同じ幅で取るようにした。フランスの17世紀の理論家は、広い5度をいくつか加えること！により、すべての調を弾ける様にする。

- ・ドイツ系は調による差があるけれど、均等にいく。フランス系は必ず広くなる5度を持つ。これにより、 $\flat$ 系のにごりが多く色づけが濃くなり、 $\sharp$ 系はさほど多くない（h-moll, fis-mollが美しくなる）。途中までミーントーンのため、半音の幅がヴァラエティに富み、効果的。各調の生み出す響きのグラデーションの豊富さ、様々な音程によって作り出される陰影。転調の際の効果と美しさ。（特に前半がmollで閉じられ、後半の始まりへの色合いの変化）

- ・筆者の演奏でF. クーブランのクラヴサン曲集よりh-mollの「L' Exquise」、c-moll「Latènèbreuse」、続いて榊形亜樹子氏の演奏でB-durの「Les Baricades mystérieuses」、fis-mollの「La Convalescente」。このラモール音律は、あくまでソロを弾く上での想定。

- ・藤原氏は『調律のやりやすさのために、美しさを捨ててよいのだろうか。』と問いを投げかけ、さらに、作曲家が求めていた響きに従って楽器を調律し、演奏して、そこから美しさを響きとして捉えることが、演奏家には重要だと説く。

（野澤知子・記）

\* 13時－14時半：昼休憩。

素晴らしい庭の散策、茶室でのお抹茶サービス、見事な桜の眺めなども手伝って参加者同士くつろいだひと時を過ごした。風間千寿子氏所有のプレイエル・ランドフスカモデルを展示してあるサロンでは、氏自ら楽器見学に応じられ、館所有のSPレコードの試聴も行われた。バイオニア音響歴史展示室の見学、安達・久保田各工房の楽器の試奏も続けられた。

\* 14時半－17時 Bホール：シンポジウム

「チェンバロ第1世代の当時の状況と現状からの展望」本日の目玉イベントである。この方々が集まって下さった事だけでも驚嘆すべきであり、唯一無二の素晴らしい機会となった。司会の岡田龍之介氏（その穏やかで、ポイントを押さえた名司会ぶりは際立っており見事の一言）による、日本の「第1世代」はランドフスカの弟子達に学んだ「第3世代」である事、現在邦人チェンバリスト最高齢であろう、有賀のゆり氏（フリッツ・ノイマイヤー氏に師事、同志社大学名誉教授）が御欠席であるが、熱いメッセージが寄せられている事などの説明の後、各人の話を伺った。以下、ほんの一部だご紹介しておく。

まず西川清子氏。1956年にピアノでウィーンへ留学直前、故郷啓成氏に、エタ・ハーリッヒ・シュナイダーという人がチェンバロを教えているから、必ず習ってくるように言われた。挨拶に行くと、チェンバロを習うならピアノを捨てろと言われ一度は断ったが「私の演奏を一度聞いてからお帰りなさい」と目の前で弾き出し、それに完全に魅了されてしまった。厳しい事で有名であり、レッスン室に入って来る歩き方から音楽的であるべきなど、要求は幅広かった。

続いて風間千寿子氏は、ランドフスカが亡命したアメリカで育った弟子達を作った「ランドフスカ・センター」で、1963年からポストヴィック氏に師事（同時代にカークパトリックに師事した橋本英二氏が今もアメリカ在住）。帰国後、何とかこの楽器を身近に知ってもらおうと、1970年から20年間にわたり日本で初めての試みとなった「サロンコンサート」を開催。初めは大正琴のようですね、という客の感想だったという。

山田貢氏は西川氏の3年後にウィーンへ。「怖い」H. シュナイダー（彼女の日本語がおかしい、と口答えて怒りを買ったエピソードに会場は沸く）と対極の「優しい」イゾルデ・アールグリム氏に師事。帰国時に持ち帰ったシュペアハーケ（勘違いの日本仕様でベニヤ板など使われた）、三宅春恵氏がアメリカから持ち込み横浜のピアノ工場で組み立てた日本初のハーバードのキット、プロモーション演奏がきっかけで購入したルビオなど歴史的楽器の日本導入裏話は必聴であった。日本の教育機関での苦労話、アメリカが期せずして古楽復興に果たした役割の再確認なども。

小林道夫氏は1965年にドイツのデトモルトへ留学。ヴァイセンボルン氏のピアノの室内楽クラスをメインにチェンバロも、と申し出たところ、チェンバロ科をメインにして室内楽を取る方が学費が安いと勧められ、イルムガルト・レヒナー氏のクラスに入学。ラジオ東京（現TBS）が購入した5本ペダル付ノイペルト（本番当日のみの使用許可！）で米人指揮者のレジスター指示の下でのバッハ・カンタータ、7本ペダル百瀬ハーブシコードでの若杉弘氏指揮ブランデンブルク協奏曲など、日本の通奏低音黎明期の証言の数々を披露。

ヴィットマイヤー、シュペアハーケなどペダル操作のチェンバロ全盛で、足技が前面に出る時代だった。F. ブリュッヘン初来日時（1973年）にノイペルトでは拙い、と渡邊順生氏所蔵のハーバード・キットを借りた。モダン楽器では気にならなかった連続音程などが聞こえて来たという。

\* 続いて2人のパネラーより発言。

渡邊順生氏は1971年大学在学中にチェンバロと出会い、小林道夫氏の門を叩いたその日にG. レオンハルトの名前を聞きLPを聞き漁る。当時歴史的楽器といっても爪を削るというアイデアがなく、割鐘のような音だった中、彼の楽器の音が他とまったく違う事に衝撃を受けた。3年後に日本で3台目のハーバード・キットを持ってレオンハルト氏の元へ留学。楽器を見に来たシェティル・ハウグザン氏に、これでは駄目！と言われ爪を削ってもらった事、3日に一度は故郷榮蔵氏に楽器情報の長文の手紙を送り、遂に有田正広・千代子夫妻の手伝いもあり、堀氏とのヨーロッパの楽器博物館巡り、M. スコプロネク氏訪問が実現した事など、日本の歴史的チェンバロの受容発展史を生き生きと語った。

荒川恒子氏は、御自身の古楽へのめり込む発端からケルン留学、山梨大学での教職活動が甲府のコンクール開催へどのように繋がったのか説明。今年25回を迎える山梨古楽コンクールは、日本の古楽史そのものである。物事は1つのパターンを作って踏襲していれば良い訳ではなく、常に水遣りが必要。コンクールの使用楽器のアレンジの苦労、同時開催の楽器展示がもたらした副産物についてなど語った。他人の用意したものではなく、自分で自分の道を見つけて行く事の大切さ、人間にとって音楽が必要だとしたら、それを証明出来るのは我々しかない、との深い言葉は見事にこの日の目標となる精神を具現していたのではないかと。

時間を延長して終了後、皆が6名の歴史を背負った体験に感銘し、もっと詳しい話を伺いたいという声がここそこで聞かれた。20代の奏者たちなどは、名前さえ知らなかったという方もいらしたようで、貴重なチャンスであったと思う。続いて安達氏の司会、小林氏の乾杯の音頭で懇親会開始、充実した楽しいひと時であった。最後になったが、松本音楽迎賓館長横田堯氏を始めスタッフの皆様への全面的協力に、心より感謝申し上げる。

（古楽情報誌アントレより、許可を得て一部転載）



懇親会の様子

座談会

『日本のチェンバロ製作の曙と現在』

7月22日 14:00 開場  
要町 Space1F

座談会発言者 柴田雄康、久保田彰、伊藤福一、安達正浩、  
三上達也、渡邊順生

昨日のチェンバロ製作者が日本の曙を語る！緊急過ぎて行けないとお叱りも、勿論良く判った上での開催でしたが、たくさん集まって頂き感謝です。貴重な証言の数々でした。モダン・チェンバロが主流であった1960年後半に、ヨーロッパでのオリジナル・チェンバロ復興、製作の流れからまったく遅れる事無く始まった日本でのチェンバロ製作。その当時の苦労話(?)の数々に聴衆再度は何度も目を丸くする場面がありました。何故作るようになったのですか?という疑問に、制作者は皆「作れると思ったから」と口を揃えて返答があったのには、舌をまきました。なかでもボールペンをジャックに、廃棄戸棚を響板にした新宿高校備品リサイクルチェンバロ!はびっくりです。想像力と創造力の結婚、音楽への熱い希求の成せる技、脱帽です。また、モダン・チェンバロとの奏法の違いや楽器の特性への熱い議論も交わされ、興味深い2時間となりました。

共催

日本チェンバロ協会、ノワ・アコルデ音楽アートサロン

「チェンバロの日! in 大阪」

10月20,21日

4月に東京で行われた主催行事の大阪版が開催されました。関西地域のチェンバロ奏者と関東のチェンバロ協会の発起人2名が加わって開催されました。チェンバロを多角にご紹介する、また調律体験講座を開催するなど、普及も視野に入れた催しでした。古楽情報誌アントレの1,2月号で詳しい報告が会員によってレポートされておりますのでご覧下さい。3月以降には、会報、HPなどでも掲載いたします。



2台のチェンバロ 加久間朋子氏と中野振一郎氏



講座 河野まり子氏



調律講座 講師 菜形亜樹子氏



講座 井岡みほ氏

# チェンバロ協会 催しもの ご案内・・・♪

## ●特別例会 日本チェンバロ協会主催講座 | 1月19日(土)

2013年1月19日(土) 17時30分～20時  
 古楽研究会 Space 1F (定員 50名、要予約)  
 公開講座【鍵盤奏者の為の通奏低音教本】  
 A Thorough and Continuous Figured Bass Workbook for  
 Keyboard Players  
 講師：フランス・フィッチ (フェリス女学院大学音楽学部  
 客員教授)  
 会費：A 会員 = 旧個人会員 : 2000 円、  
 B 会員 = 旧個人サポーター : 3000 円  
 C 会員 = 旧団体会員 & D 会員 = 旧法人サポーター 4000 円

## ●第1回例会「チェンバロと私」～小林道夫氏を囲んで～ | 2月2日(土)

2013年2月2日(土) 19時～21時終了予定  
 古楽研究会 Space 1F 定員 40名 (要予約)  
 お話と演奏：小林道夫氏 (チェンバロ奏者、日本チェンバロ  
 協会会長)  
 今年の7月に本格始動した日本チェンバロ協会では、第1  
 回例会を開催します。初代会長・小林道夫氏による1時間ほ  
 どのお話と演奏の後、質疑応答、歓談など(ワイン・ソフト  
 ドリンク付き)の予定。  
 チェンバロ音楽がより親しみやすくなるようなお話と演奏  
 に加え、小林氏がこれまでチェンバロとどのように関わって  
 きたか、またモダンチェンバロからヒストリカルへの移行、

会場 古楽研究会 Space 1F  
 東京都板橋区中丸町 10-1 古楽研究会ビル 1階  
 TEL.03-3530-7280(想楽舎) <http://www.space1f.com>

予約・お問合せ 日本チェンバロ協会 事務局  
 TEL.03-3530-7280 FAX.03-6806-0633  
[info@japan-harpsichord-society.jp](mailto:info@japan-harpsichord-society.jp)  
<http://japan-harpsichord-society.jp>

## ◆事務局からのお知らせ◆

日本チェンバロ協会 会員の皆様

発足からは約1年が経ち、この度会員の更新時期が参りました。是非ご継続をお願い申し上げたく、手続きのご案内をさせていただきます。また7月の総会にて、会員の名称等に変更がございましたので、こちらも併せてご案内申し上げます。以下、ご確認の上、お手続きのほどよろしくお願い申し上げます。

※当協会ではお申し出がない限り毎年自動継続となり、継続手続き(会費納入)をお願いしております。

- ・退会ご希望の場合は事務局までご一報下さい。
- ・更新のお手続きにあたって

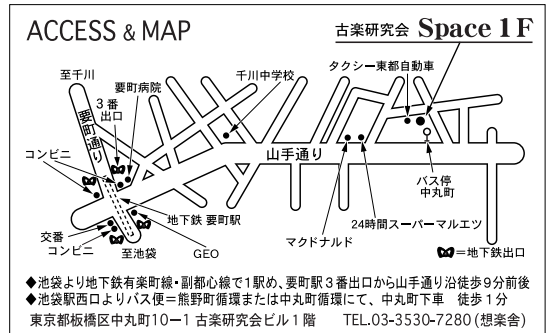
7月の総会にて、会員の名称が変更されました。これまでに個人会員・学生会員としてお申込み下さった方は「A会員」、団体の方は「C会員」、個人サポーターの方は「B会員」、法

## フランス・フィッチ

北米や欧州、世界各国で演奏会を行う。スイス、ドイツ、オランダ 他、フランス国営ラジオ、BCC と NPR など で録音。1983年彼女の所属する「コンツェルト カステッロ」は『Deutsche Schallplatten Preis』を受賞するなど、通奏低音奏者としても数多くのアンサンブルと共演している。パーゼルスコラカントルム、ウェスレー大学、タフツ大学、ニューヨーク音楽院などで教鞭をとる。  
 ★アメリカ・ボストンから来日中のフランス フィッチ女史による通奏低音の教授法が出版されました。五感で学ぶ新しいメソッドをご一緒に体験してみましょう。  
 講座での演奏者(4名限定・全レベル)も募集中。

いて等々、次世代に伝えたいことも盛り込んだ内容を予定しています。小さな会場で、小林氏のお話と演奏を間近に聴ける貴重な機会です。愛好家にもチェンバリストにも楽しめる内容ですので、たくさんのご参加をお待ちしております。  
 会費 A 会員：無料+ドリンク代 500 円  
 B・C・D 会員：1,000 円+ドリンク代 500 円  
 一般：2,500 円+ドリンク代 500 円  
 ※A=旧個人会員、B=旧個人サポーター、C=旧団体会員、D=旧法人サポーター

★ 今後は東京(松本記念音楽迎賓館)で5月3日(金祝)、4日(土祝)に「チェンバロの日!」を開催する予定です。今回は楽器に焦点を当てた企画を立てております。



人サポーターは「D会員」となります。また、一部の年会費も改められました。下記をご参照ください。

## ◆年会費

- A 会員 (個人) 6,000 円 (学生) 3,000 円
- B 会員 3,000 円 (サポート金は一口 3,000 円から)
- C 会員 12,000 円
- D 会員 10,000 円 (サポート金は一口 10,000 円から)

◆お振込先 ・郵便振替口座 00180-2-777751 想楽舎  
 ・銀行からご入金の場合は、ゆうちょ銀行 019 店 当座 0777751 ソウガクシャ 手数料はご負担願います。ご住所、メールアドレスなど連絡先の変更、A 会員・B 会員等それぞれへの変更などご不明の点は、事務局までお知らせ下さい。ご遠慮なくお問い合わせ下さい。